平成31年度　岡山県立西大寺高等学校　学校評価書

		重点目標と評価	【中間評価】	【最終評価】	個別評価	総合評価	評価基準
学校経営目標	新しい時代を生き抜く力を持った生徒の育成 ～自己肯定感を高め，進路目標に向かって主体的に学ぶ生徒の育成～	1　学びの環境を整備し、生徒の能力を最大限に引き出す。 （１）物理的・精神的環境を整え、生徒の心身の健全な成長を支援する。 （２）進路指導（＝キャリア教育）体制を再構築し、生徒・保護者・地域の満足度を高める。 （３）地域の人的・物的資源を活用しながら生徒の挑戦を支援し、生徒の希望の実現に努力する。	・新教育課程編成に向け、各種研修会に参加し、情報収集している。 ・生徒の声を受け止め早期発見解決に努める支援体制を構築し、対応が後手にならないようにする。 ・英語の外部検定試験対応の準備等、4技能（聞く、話す、読む、書く）の英語力向上を図っている。 ・小、中との地域連携による活動や、地域人材を活用した講演会を実施した。	・新教育課程編成に向け、研修会等に参加し情報収集できた。週時程も考慮した、より魅力ある教育課程編成を行った。 ・3年生は推薦・AOを含む国公立大学への意識が高まり、よりレベルの高い国公立大学を目指しAOや推薦にチャレンジしている。1・2年では各教科で授業や教材・定期考査に新テストを意識した内容を盛り込む取り組みを行っているが、まだ不十分である。 ・社会貢献活動として地域の公民館、学習体験施設を活用した小学校・中学校との連携による学習教室、異文化理解等の活動や地域人材を活用した講演会を実施した。	B	C	A　当初の見込みを超える取組を行うことができ，目標を上回る達成状況である。 B　当初の見込みどおりの取組を行うことができ，ほぼ目標どおりの達成状況である。 C　当初の見込みの取組を行うことができず，目標を下回る達成状況である。
		2　生徒の論理的思考力を高め、考える力を基盤とした七つの力の獲得に努める。 （１）主体的・対話的で深い学びの実現を核として授業力向上に努める。 （２）生徒の活動を肯定的観点から評価し、エビデンスに裏打ちされた教育活動を行う。 （３）探究活動の充実を通じて、地域貢献意識や自己肯定感を高める。	・OJT校内チーム研修で、思考ツールを活用した情報活用能力の育成と効果的なICT活用の授業研究を行っている。 ・秋桜祭（文化の部、体育の部）で、学年を超えて様々な活動を通じて、豊かな人間性を身に付け、協力する力・柔軟性を養うことができた。また、異文化理解学習（岡大留学生との交流）を行い、コミュニケーション能力の育成と進路意識醸成を図った。 ・CCT（総合的な探求の時間）を活用した探求活動による進路意識を持たせる活動に取り組んでいる。	・OJT校内チーム研修や研究授業・公開授業を実施した。OJT校内チームから、全体への研修会として、ICT活用により授業実践から、魅力ある授業づくりを考える機会になった。 ・地域イベントに参加、開発商品の販売実習を行い、地域に根付く、地域を考える活動を通して、深い学びの活動が出来た。 ・研修会に教員が参加し，情報を共有し，授業改善及び業務改善に取り組むことができた。研修で得られた成果で，本校で取り入れられるものについては，取り組んでいく方向である。 ・CCT（総合的な探求の時間）を再構築し、キャリアプランを考えさせ、探求活動に取り組む機会を考えさせたい。	B	B	

該当する経営目標の番号	課・学科・学年等	具体的目標	具体的計画	達成基準	中間期 達成状況	中間期 個別評価	中間期 総合評価	年度末 達成状況	年度末 個別評価	年度末 総合評価	年度末 結果の分析	年度末 改善のための方策	学校関係者評価 評価の妥当性	学校関係者評価 改善方策の適切さ
1	総務課	・地域の人的・物的資源を活用し、生徒が社会貢献活動やボランティア活動等に参加する場をより多く提供し、生徒の進路選択・希望進路実現に向けた挑戦を支援する。	・百花プラザや公民館等、地域の施設との連携をより深め、生徒が主体的に参加できる活動機会の充実を図る。 ・現在、地域と連携し行われている様々な活動状況を集約・整理するとともに、新たな繋がりを模索する。	・学校自己評価アンケート「社会貢献活動やボランティア活動の機会が多く設けられている」の生徒の評価ポイントが85を超えている。【H30年度 85】 ・現在、地域と連携し行われている様々な活動状況が集約・整理できている。	・例年通り、社会貢献活動やボランティア活動の機会を多く設けている。今年はインターンシップへの参加も生徒に求めている。 ・夏休みを中心に、地域と連携して行われている活動の状況を、集約しているところである。	B	B	・百花プラザや公民館等で行われる社会貢献活動には1、2年生全員が取り組んだ。小学校での学習指導活動等に参加する生徒も増えている。 ・吹奏楽部・書道部等を中心に、地域のイベント等において様々な形態で連携活動が行われた。	B	B	・本年度から社会貢献活動の一環としてインターンシップなどに関わる活動への取り組みを求めたため、教育的活動への参加者が増えた。 ・地域と連携した活動として、新たに講演会が行われた。	・生徒がインターンシップ活動に取り組み易いよう、環境の整備が求められる。受入れの案内は多いが、地理的に無理な場合が多い。 ・様々な面で負担増にならないように配慮しながら、新たな繋がりを模索していく必要がある。	妥当である。	適切である。
	教務課	新学習指導要領の施行に向けて、教育課程や内規の整備を行う。	・各課・室、教科との連携を図り、情報の共有を行う。 ・校外での研修に複数回参加し、情報の収集を行う。	・新教育課程（案）が年度末までに完成する。 ・整合性のとれた内規が年度末までに完成する。	新教育課程編成に向けて意識付けを行うために、各教科へ希望調査を行った。また、説明会や研修会に参加し、情報を収集しているところである。	B	B	・新教育課程を編成するための意識付けは徐々にできてきているが、素案程度までの完成度となっている。 ・内規については、新教育課程が完成しなければ見直せない部分もあるので、十分な整備はできていない。	B B	B	・新学習指導要領の説明会が実施され、多くの教員が研修を受けているが、その情報が共有できていない。 ・大学入学共通テストの全貌や各大学の入試情報が不十分なため、工夫をするところには至らない。	・学校や各学科の方向性や教育目標を教員全員が共有すること。 ・他教科の学習指導要領についても理解を深め、俯瞰して教育課程を検討できるようにすること。	妥当である。	適切である。
	生徒課	学校内外での諸活動を通じて、生徒が豊かな人間性や社会人としての資質を身につけるための援助を行う。	・TPOに応じた態度の醸成を通じて、公共心に富んだ社会人としての自立に必要な情況把握力・傾聴力・発信力・柔軟性を向上させる。 ・論理的な対話により、交通法規も含めたコンプライアンスの意識を高めさせる。 ・生徒会活動などの特別活動や部活動に、本校の定めた活動目標や方針に基づきながら効率的に取り組ませ、心身の健全な成長を促しながら、協力する力・実行力・自他肯定力を向上させる。	・100%の生徒が制服の着こなしや頭髪などの身嗜みを整えることができ、積極的に挨拶することができる。 ・重大な交通違反や事故の件数が0となり、かつ年度末の学校自己評価アンケート「社会人としてのマナーやルールを学習する機会がある」の生徒の評価ポイントが60を超えている。【H30年度 57】 ・特別活動や課外活動に多くの生徒が学業優先の意識を持ちながら、能動的に参加している	・身嗜みを整えられる生徒は、制服が旧仕様の3年生も含めて、全体の95%は超えている。だが、5%未満の問題がある生徒の改善は進んでいない。その少数派が学校の印象を決めているという意識の共有が必要である。 ・重大な交通違反や事故の件数は0を維持できている。 ・生徒会活動は受け身ではなく、納得できる理由があれば、能動的に取り組めることを証明してくれる機会がみられた。部活動その他で本校の肯定的評価につながる成果や取組みが多々見られた。	B	B	・極端にスカートの丈が短い生徒は、ごく少数派となり、新仕様のスカートの完成年度となる来年度に期待できる状態である。ただ頭髪の加工も含めて、指導不要の生徒は皆無ではなく、継続的指導が必要である。 ・交通に関わる重大な事案は発生していないが、軽微な事故はあり、その際に警察への届けを怠っているケースが目立つ。啓発が必要である。 ・生徒会活動は秋桜祭などへの取組みにおいて自主性を発揮した。部活動では全国大会以下各種大会、地域のイベントで本校に対する肯定的評価を高める活躍を示した。	B B A	B	・本校の生徒の気質にも変化が見られる。「幼稚」という一言で片づけられない事案が散見されるのも本校が新しい局面を迎えつつあることの証である。ただ問題行動のある生徒にも可塑性を感じる。即ち指導されるべきことをされていないという側面がある。だからこそ教員は積極的かつ丁寧な指導・対応が求められる。 ・自由な校風・生徒の自主性を維持しながら，地域社会から評価される学校となるのは，生徒の自律が必要だが，その点で特別活動や部活動は重要な役割を果たした。	・本校は長い歴史を持つ伝統校で自由を尊ぶ校風である。良き伝統は堅持する必要がある。しかし，生徒も教員も毎年入れ替わり，保護者や世間の価値観も変化していく中で，学校の指導方針を微調整することは必要である。そのような修正には生徒間，教員間，生徒と教員間の双方向的な対話が欠かせない。	妥当である。	適切である。
	進路指導課	他課室や英語科を中心とした他教科と連携して1・2年生の新たな入試制度への対応を進めるとともに、生徒が希望する進路の実現を可能にする。	・『進路便り』、CCT、保護者説明会等を利用して、新入試制度の具体的な内容を周知させ各教科で対応を進める。 ・各学年の段階で取り組む課題を理解させ意識させ、進路実現に向けて自ら取り組む姿勢を身に付けさせる。 ・より高い進路実現に向けて卒業まで粘り強く頑張り抜く生徒を増やす。	・1年生のすべての生徒が新入試制度を理解し、2年生は各教科で新テスト対応の具体的な取組を行っている。 ・3年生の普通科・国際情報科生徒の85%以上がセンター試験を受験する。【H30年度 84%】	英語科と連絡を密に取りながら、2・3年生の外部検定試験共通ID取得及び2年生の英語外部検定受験へ向けての準備を進めている。3年生には進学・就職ともに希望進路実現に向けての指導を継続している。特に安易に指定校推薦に流れないように、またAO・推薦を含めて国公立大学へチャレンジするように呼びかけている。	B	B	3年生は推薦・AOを含む国公立大学への意識が高まり、また2年生では新テストや英語外部検定取得への情報収集のためと,2・3年の保護者対象説明会では例年にない多くの参加であった。3年生はよりレベルの高い国公立大学を目指しAOや推薦にチャレンジしている。（推薦・AO出願は昨年の1.5倍、センター試験出願84%）1・2年では各教科で授業や教材・定期考査に新テストを意識した内容を盛り込む取り組みを行っており、新テストの内容を徐々に理解してきている。	B	B	私立大学の推薦・AO入試については清心・就実・川福の医療系については厳しい結果であったが、その他については順調であった。国公立大学の安全志向、私立大学の難化など取り巻く状況は厳しいが後期入試まで粘り強く受験を継続させ指導を行っている。2年生からの英語外部検定は延期になったが、英語4技能が必要であるという意識は高まっている。	多様な受験に対応させるため、早い時期から総合的な探究の時間を通しての研究活動やプレゼンテーション、大学の主催する模擬講義や企業見学などキャリア教育の指導に積極的に取り組む。あらゆる進路に対応できるよう、学習習慣（家庭学習時間の確保）と基礎学力の更なる定着に取り組む。	妥当である。	適切である。

該当する経営目標の番号	課・学科・学年等	具体的目標	具体的計画	達成基準	中間期			年度末					学校関係者評価	
					達成状況	個別評価	総合評価	達成状況	個別評価	総合評価	結果の分析	改善のための方策	評価の妥当性	改善方策の適切さ
1	厚生課	・校内美化に力を入れ、教育環境の整備に努める。 ・奨学金が活用しやすい環境を整える。	・教室・廊下・トイレを重点的に清掃する。 ・様々な奨学金を広く認知させ、利用しやすい環境を整える。	・学校自己評価アンケート「校内美化が図られ、落ち着いた教室環境が整っている」の生徒の評価ポイントが上昇する。【H30年度 42】 ・奨学金に関する業務の効率化や見直しができた。	・教室・トイレ・廊下の清掃状況は概ね良好と考えられるが，一部に不十分なところも見られる。 ・様々な奨学金を生徒・保護者に紹介し，利用環境は整備されている。	B A	B	・学校自己評価アンケートの結果は平成30年度とほぼ同一評価であった。校内美化や教室などの環境整備は良好であったと考えられるが，清掃など一部不十分な個所が見られた。 ・奨学金に関しては担当者の力に頼らざるを得ないところは大きいが，分業による効率化を図り，限られた時間で最大限の利用環境が整えられた。	B A	B	・アンケート結果の向上が見られなかったのは施設の老朽化によるところもあるが，使用方法や清掃により対応可能な部分もあると考えられる。 ・日本学生支援機構の奨学金については制度や様式など変更が多く，担当者の負担が大きかったが，効率化を考えながら迅速かつ丁寧な対応で適切に業務を行った。	・老朽化した施設の改修を進めるとともに，整美委員会の活動を活性化させることにより施設の使用マナーを向上させ，清掃徹底の指導も進めていく。 ・保護者への奨学金の周知を図るため，webページの活用による情報提供を進めることにより漏れや遅れを減らし，更なる環境整備が可能である。	妥当である。	適切である。
	図書課	・図書館を活用した探求活動の充実を図り,読書に親しむ態度を育てる。 ・視聴覚・情報処理関連機器の活用頻度を向上させる。	・図書委員会活動の充実と,授業での図書館利用を促進し,読書への関心を高める。 ・継続した保守により利便性を向上させるとともに活用の研修会を開催する。	・授業・CCT・LHRで100時間以上の図書館利用時間数があり、貸出冊数が5,000冊を越える。【H30年度 4500弱】 ・ICT機器の週１回程度の充電・アップデートや視聴覚機器の月１度程度の点検を80%以上行うことにより,利便性を向上させる。	・授業での図書館利用が図書の貸出しにもつながり,貸出冊数は昨年同期より約千冊増加している。図書委員会の活動にも深い探求が見られた。 ・視聴覚機器等の定期的な保守点検を実行している。	B B	B	・図書館利用時間数133時間,貸出冊数4,612冊（11月末現在）3学期には目標の5,000冊を達成する見込み。 ・iPADは常時充電できるように,また教室用PCも保管場所で充電できるようにした結果,活用度が上がった	A B	A	・授業での図書館利用が大幅に増加し,有意義な取組や司書の的確なサポートもあり未読者が約１５０人まで減少した。 ・定期的な保守点検を行うことで利便性が向上し,利用も増えた。	・図書館がより充実した探求活動の場となるよう,資料と環境面を整備したい。 ・アップデートの作業やメンテナンスをより充実させるため人員が必要である。	妥当である。	中間期評価を加味した評価で、適切である。
	教育相談室	・心に悩みを持つ生徒が安心して相談できる環境の整備に努める。	・長期欠席者・不登校生徒・保健室頻回利用者の情報を的確に把握し、チームで迅速な対応をする。 ・特別支援教育との連携を密にし、心の問題と発達の問題を混同することなく適切に対応する。	・月に1回以上、情報共有のための会議を開く。 ・長期欠席者・不登校生徒・保健室頻回利用者の情報が気づきシートに蓄積され、学年の中で共有されている。	定期的な会議における情報交換により、各学年の状況について把握することができた。この会議で報告された事柄については、管理職へ伝達を行った。場合によっては学年団や担任への助言を行い、対応が後手に回らないようにしている。	B	B	一年間を通して、定期的な会議を実施し、各学年の状況を把握することができた。後半はケース会議を持つことが増えた。ときには外部（SC）との連携をして、ケースに応じて適切な対応をすることができた。	A	A	担任による問題の抱え込みが起こらないように配慮した。不登校生徒を複数抱えるクラス担任への支援も行い（学年団への呼びかけ、保健室によるサポート等）問題が深刻化することは避けられた。	「悩みを抱える生徒」だけでなく、「保護者」へのサポートを行う視点を持つことで、さらに状況を改善させられるように感じている。 「気づきシート」への記入が情報把握に役立っている。来年度以降も呼びかけたい。	妥当である。	適切である。
	1年	学習を中心に捉えた基本的な生活習慣の確立を図る。 家庭学習の習慣を定着させる。	普通科と国際情報科は週あたり一日平均の家庭学習時間を3時間以上確保させる。週末課題をきちんと取り組ませる。 商業科は自主的に学習に取り組む時間を確保させる。	普通科と国際情報科は週あたり一日平均3時間以上の割合を60%以上。週末課題提出率90%以上。 商業科は検定合格率を上昇させる。	週末課題提出率は概ね達成できている。引き続き指導を続けていく。6月の学習実態調査では3時間以上が20%であり，目標に達していない。次回の学習実態調査では少しでも近づけるように各教科や各担任で声掛けをしていく。商業は引き続き目標を達成するため，指導を続けていく。	B	B	週末課題提出率は概ね達成できている。 10月の学習実態調査では3時間以上13%、4時間以上が5%であった。二学期での中だるみが表れていると思える。二年生進級に向け，より主体的な取り組みが期待できると分析したい。	C	C	具体的な目標が設定できていないため，宿題以外の家庭学習の必要を感じる生徒が少ないようである。	より具体的な進路目標の設定をさせる。毎日の「目標－学習－評価」のサイクルを記録させる。1年次を振り返り，より効果的な学習方法を身に付けさせる。	基準の妥当性又は改善のための方策を検討する必要がある。	前年との比較も必要であるとの指摘を受ける。
	2年	主体的な学び、対話的な学び、深い学びの必要性を理解させ、将来の進路実現を目指した継続的な学習に取り組ませる。	授業スタンダードの実践、定着をはかる。 スケジュール帳を活用させ、学習活動の中にもPDCAサイクルを意識させる。	家庭学習3時間以上の割合60%、4時間以上30%。 【1年時平均　3時間以上19%，4時間以上6%】 スケジュール帳の活用率90%以上。	6月調査では、3時間以上13%（昨年19%）、4時間以上が3%であった。昨年からも減少している。2学期以降、より具体的な進路目標をたて、学習意欲を向上させる取り組みを通して、学習時間の増大が必要である。スケジュール帳のアンケートも予定している。	B	B	10月調査では、3時間以上13%、4時間以上が3%であった。6月から横ばいの数値であった。	C	C	進路目標の設定がまだまだ不十分である。宿題以外の家庭学習の必要を感じる生徒が少ないようである。予習・授業・復習の学習のサイクルが確立できていない。	具体的な進路目標を設定し、その実現に向けた学習計画を明確にする。適切な学習課題の量と、家庭学習を必要とする授業展開の工夫が求められる。	同上	同上
	3年	進路実現に向けて適切な進路指導を行い、生徒の希望を実現させる。	細やかな面談を行い、適切な進路情報を与える。 学期やテスト後に振り返りをさせ、改善策を考えさせる。	学校自己評価アンケート「将来の進路や生き方について学習する機会がある。」について「よくあてはまる」と答える生徒の割合が2年次より5%アップする。【2年次は52%】	各クラスで細やかな面談を行っており個々に合った進路指導を行っている。実力考査や校外模試の振り返りをさせ、次に何をすればよいか考えさせている。	B	B	個々の進路実現に向けて細やかな面談を行い、将来の進路や生き方について学習する時間を設けることができた。	B	B	進路実現ができた者は肯定的な意見を持っており、私立や国公立の推薦入試に失敗した者は否定的な意見を持つ傾向がある。	1年生から3年間を見通した、体系的な進路指導を行い、3年生になって慌てないようにさせることが必要である。	達成基準に対する年度末達成状況が客観的でないとの指摘を受ける。	同上
2	普通科	キャリア教育の推進を通して、各学年の段階に応じ、人生設計の一部としての進路意識を持たせ、生徒一人一人の目標達成のために取り組む力をつけさせる。	進路指導課・学年・担任・教科と連携し、LHR・CCT・担任面談を通じて進路（学習）への意識を高め、特に進学を見据えた学習活動の充実に向け働きかける。	普通科だけの行事や集会というものはないので、他の校務分掌・学年の進路指導の達成が、「科」としての達成に繋がると考える。	進路指導課、学年団の一員としての立場で日々生徒に対し、授業やCCTを通じて進路意識をもたせたり、学習活動に目を向けるべく指導を続けている。	B	B	普通科だけの行事や集会というものはないため、進路指導課、学年団の一員としての立場で生徒に対し、進路意識をもたせたり、学習活動に目を向けるべく指導を続けた。	B	B	普通科として最後まで学習活動を継続する姿勢については指導し続けた。進路実績の評価は進路指導課に委ねるものとする。	例年問題となっていると思われる、進路が早々に決定した生徒に対する指導、そもそも安易に指定校推薦に飛びつかせない、補習や模試を前向きに臨まない生徒を推薦しないなどの厳しさが必要と思われる。学年および進路指導課とも協議すべきものである。	妥当である。	適切である。
	商業科	ビジネス活動に関する専門的な学習を深め、関連する資格を取得し，社会貢献できる人材を育てるとともに、新学習指導要領への対応を進める。	・地域の人的・物的資源を活用して、ビジネスマナーの向上や国内外の経済事情の把握、勤労精神や地域社会貢献に対する意識を持たせ、周知する。また、必要な情報教育機器の整備を行う。 ・新学習指導要領への対応に向け、教育課程の編成や指導法の研究を行う。	・ビジネスマナーや経済事情に関する講演会等の実施及び商品販売や税の学習に関する地域社会貢献活動における満足度が80%を超えている。また、行われた活動をすべての生徒に周知する。 ・インターネットに接続され、かつ様々な情報を処理するために必要なハードウェアやソフトウェアが整備されている。 ・新学習指導要領の実施に向け、外部の情報を収集しながら教育課程表が整備できる。併せて効果的な指導法について教員の意識が高揚する。	・1，3年生は「ビジネスマナー講演会」(8/22，7/12)，2年生は「異文化コミュニケーションとビジネス講演会」(8/23)を実施し，感想文記述から満足度はほぼ100%であった。地域貢献の行事として，課題研究「商品開発」講座の生徒が，岡山市内の商店街イベントに参加し，本校Webページ上等で周知した。 ・図書課情報管理係や事務室と連携しながら，情報教育機器の安定稼働に努めた。機器更新を含めた改修に向けた準備は今後の課題である。 ・新学習指導要領の説明会や内容に関する研修会，教科「商業」の授業力向上のための各分野における研修会にも参加し，科内で情報共有した。授業の進捗状況は，商業科教員間で連絡調整をしながら共有し，機会を捉えて，授業における課題や指導法についての研修を各科目担当者間を中心として行った。	A B B	B	・地域貢献の行事として，課題研究「商品開発・開放講座」講座の生徒が，地域イベント「西大寺マルシェ」に参加し，開発した新商品「いちご一ゆ」等の販売実習を行った。また，高校生による「税務教室」実施に向け，外部講師や有識者の指導を取り入れながら進めた。これらの関連行事は，報道記事や本校Webページ上，商業科集会，校内掲示物等で周知した。 ・図書課情報管理係や事務室と連携しながら，情報教育機器の安定稼働に努めた。機器更新は今後も課題であるが，県関係機関と連携し，現行で稼動しているPC教室端末の対応はできている。 ・年間を通じて，商業に関する学校外での研修会に教員が参加し，商業科内で情報を共有し，授業改善及び業務改善に取り組むことができた。研修で得られた成果で，本校で取り入れられるものについては，取り組んでいく土壌がある。新学習指導要領への対応に向けて，校内外の状況を見ながら，より準備を進めていきたい。	A B B	B	・地域の人的・物的資源を活用した各種講演会や地域貢献活動への満足度は高いと云える。今後も継続した取組みをしていきたい。 ・県関係機関と連携し，現行で稼動しているPC教室端末の対応はできたものの，機器更新に向けて準備は校内でも検討しながら，進めていく必要がある。 ・商業科目はいくつかの分野（大きく4つの分野）があり，学校外での研修会の資料や成果を，資料回覧や担当者間研修，資料整理等で共有することができた。新学習指導要領への対応についても科内会議等で一歩前に進めることができた。	・地域の人的・物的資源を活用した各種講演会や地域貢献活動への参加は，校内で体制づくりをしっかりしながら進めていく必要がある。 ・機器更新に向けて準備は，県関係機関や事務室等と連携しながら進めていく必要がある。 ・商業科内，各学年及び科目担当者間において，新学習指導要領の趣旨を生かした主要科目の指導計画書の共同作成や情報共有により，授業改善や授業力向上につながると考える。	妥当である。	適切である。

該当する経営目標の番号	課・学科・学年等	具体的目標	具体的計画	達成基準	中間期			年度末					学校関係者評価	
					達成状況	個別評価	総合評価	達成状況	個別評価	総合評価	結果の分析	改善のための方策	評価の妥当性	改善方策の適切さ
2	国情科	岡山大学留学生との交流会、イングリッシュキャンプ、校内外のスピーチコンテストなどの行事に向けて生徒が主体的に課題を見つけ学ぶ授業を展開する。	・主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の評価と改善を行う。 ・各行事の目的と目標を明確に示し、具体的な計画を立てさせる。	・卒業時のCEFRのA2レベル相当以上の生徒の割合が100%。 ・80%以上の生徒が行事ごとの振り返りと年度末のアンケートで自らの主体的な取組と深い学びを具体的に表現できる。	・1学期に実施した2年生の岡山大学留学生との交流会では、プレゼンテーションを相手にわかりやすく伝えるように工夫し、グループトークで積極的に質問をして会話を続けようと試みるなど、昨年度の反省を活かした活動を行うことができた。 ・2学期は4つのスピーチコンテストに出場予定であり、さらにイングリッシュキャンプに向けて計画を進めている。	B	B	・校外模試や外部検定試験等の結果から、CEFRのA2レベル相当の英語力があるとみなされる3年生は100%であった。 ・実用英語技能検定準1級に2年生1名が合格した。 ・校外のスピーチコンテストには、岡山県1名、ノートルダム清心女子大学1名、吉備国際大学2名、姫路獨協大学2名、高松大学2名の計8名が出場した。入賞は逃したものの、大勢の前でスピーチをした経験は大きな自信となり、次の大会に向けて意欲を見せている。 ・イングリッシュキャンプ後の生徒アンケートでは、参加生徒全員が各自の取り組みを振り返り、次の学習活動につながる目標を設定することができた。	B	B	・進路実現を見据え、自己の英語力を高めようとする生徒が増え、積極的に学校外の活動や外部試験に取り組むことができた。 ・国際情報科集会で、卒業生から具体的な学習アドバイス等を聞き、参考になった生徒が多かった。 ・各行事の目的とゴールを生徒に明確にし、授業で計画的に準備を進めることができた。教科担当者と担任間の連携もとれておりスムーズに行事を行うことができた。	・校外のスピーチコンテスト出場者は大幅に増えたが、入賞には至らなかった。校内スピーチコンテストや授業での取り組みを活かして、入賞者を増やす。 ・イングリッシュキャンプについてはどの活動も高評価であったが、ALTの助言や生徒のアンケート結果をもとに活動内容をさらに充実させる。 ・異文化理解講座については，オールイングリッシュで行う条件を定着したため，今後も内容を吟味して継続する。	妥当である。	適切である。
	学力向上委員会	公開授業やOJT校内チーム研修等による研究授業を促進し、主体的・対話的で深い学びを実現し、学力向上に資する授業力の向上を図る。また，生徒向けの統一した授業アンケートを作成し、実施する。	・OJT校内チーム研修による課題の共有、実践を行う。 ・新学習指導要領を踏まえた授業研究を進め、全体での共有を図る。 ・公開授業・研究授業の成果を校内外に発信する。 ・生徒向け授業アンケートを作成し、各教科科目で統一して実施する（年2回）。	・研究授業を実施または参観した教員の割合が100%（教員） ・学校自己評価アンケート「授業の進め方等に工夫が見られ、分かりやすく充実した授業である」の項目のプラス評価の割合が80%以上【過去3年間では、70%台後半を推移】（生徒） ・授業アンケートの各評価項目のプラス評価の割合が80%以上（生徒）	・研究授業の実施に向けて，OJT校内チーム研修を行いながら，「主体的・対話的で深い学び～思考ツールを活用した情報活用能力育成と効果的なICT活用授業を目指して～」を実現する授業研究を行っている。10月までに全体研修を2回，チーム別研修をチームごとに実施している。 ・県総合教育センター指導主事を講師に招き研修を行うとともに，内容について職員会議や「OJT通信」文書で周知した。 ・OJT校内チーム研修において，ルーブリック評価と西高授業スタンダードを深化させるための意見を求めている。 ・企画調整会議のメンバーや各教科主任と連携して，生徒向けの校内で統一したアンケートを作成し，1学期末に実施し，今後の指導の一助とした。	B	B	・OJT校内チーム全体研修を年4回実施した。研究授業の実施に当たり，外部講師を招いたり他校の研究授業を参観に行ったりして，新学習指導要領を踏まえた研究テーマを深めた。また，研修成果を校内においては公開授業や職員会議で，校外においては指導教諭の研修会等で周知した。 ・研究授業を実施，参加した教員の数は，97%である。 ・OJTチーム及び各教科で昨年度3学期から実施している，本校において取り組むべき授業スタンダード(2学期は特に第2～5条を注視)を意識した授業展開に取組んだ。 ・生徒向け授業アンケート「雰囲気づくりや授業への熱意を感じる魅力ある授業である」の項目のプラス評価の割合は，全体では94%であった。	B	B	・研究授業では，各チームが「主体的対話的で深い学び」をテーマに授業研究に取り組み，ペア学習やグループ学習等の形態，発問や課題発見の方法等の探究，日常的なICT活用授業，情報活用能力育成の一助として思考ツールを活用した授業展開において工夫することができた。 ・OJTチームから各教科への還元が十分できていない。 ・生徒向け授業アンケート「雰囲気づくりや授業への熱意を感じる魅力ある授業である」の項目のプラス評価の割合は，どの学年も90%を超えたものの，教科科目の特性により評価にばらつきがあった。	・新学習指導要領で求められている授業について，理解と実践が進むよう，OJT校内チーム研修の継続的な実施及び成果発表の機会を設定する必要がある。 ・県内外の研究授業等を積極的に活用する。 ・今年度から実施している生徒向け授業アンケートの結果から，「担当教員の授業」と「自らの学習活動」についての具体的な改善点を把握できるよう検討したい。 ・西高授業スタンダードが教員・生徒ともに実効性のあるものとなるよう，適時確認の機会を設ける。	妥当である。	適切である。
	1年	社会貢献活動などさまざまな体験活動や地域との交流を行い、明確な進路意識・課題意識を持つ。	CCTの授業を活用して大学訪問や出前授業を行うことにより、学問研究や自己の在り方や生き方について考える。	学校自己評価アンケートの「将来の進路や生き方について学習する機会がある。」の生徒の評価ポイントが80を超える。【H30年度 76】	1学期のCCTでは，地域の方に講演会を行ってもらい，地域の活動を知るというきっかけづくりができた。2学期には大学訪問や出前授業を充実させるために計画を進めている。	B	B	学校自己評価アンケートの「将来の進路や生き方について学習する機会がある。」の生徒の評価ポイントが83.8であった。 新聞づくりや大学訪問を通して進路意識は少なからず高まっていると思える。	B	B	各クラス各グループで新聞づくりを協力して行ったり，大学訪問後クラスで発表したりすることができるようになってきている。	キャリアプランを考えさせるとともに，進路ガイダンスやプレゼンテーションの出前授業を行うことで，実現に向けて取り組ませる。	妥当である。	適切である。
	2年	社会の変化（入試制度、就職試験等）の対応できる人材を目指し、七つの力を獲得させる。	CCT、修学旅行の事前事後学習、学年集会等で、生徒自身の意見考えを発表させる。また他人の意見からも、さらに深い学びを意識させる。「キャリアノート」を活用させ、自身の振り返りを行いながら、七つの力が身についたかを確認させる。	年度末にアンケートをとり、進路意識（目標設定）が深まった者90%以上。Eポートフォリオへの入力状況100%。	CCT,修学旅行のまとめ発表等、情報収集、分析、まとめと、体験の場面はあった。今後課題研究等でも，各自のテーマに沿った情報収集，分析、発表に取り組む。さらなる意識高揚と，高い目標到達に向けた実践に取り組む。	B	B	学校自己評価アンケートの「将来の進路や生き方について学習する機会がある。」の評価ポイントが68.6であった。修学旅行の取り組みの中でのキャリア研究は概ね達成できた。各々の発表の中にも工夫が見られ、プレゼン能力の習得にも成果が見られる。	B	B	さらに発展的に、課題研究（CCT）に取り組んでいる。各自のキャリア研究につながるテーマ設定を基に、調査、研究、分析、まとめが順調に進んでいると思える。	研究成果をもとに各自の学習課題を設定し、進路目標実現にむけた学習・受験対策を開始する。また、あらゆる場面を想定した、プレゼン能力を習得させる。	妥当である。	適切である。
	3年	7つの力の育成・伸長を図る。（その中でも「傾聴力」と「発信力」に重点を置く）	授業の中で主体的・対話的で深い学びができるように授業改善を図る。 授業内外で、論理的思考力を育成し、「傾聴力」「発信力」を伸ばす。	12月にアンケートをとり、4月に比べて「傾聴力」「発信力」が伸びたと答える生徒が60%を超える。	授業の中で発表したり、発表を聞く場面を提供するだけでなく、面接練習などで「傾聴力」や「発信力」を伸ばす訓練をしている。	B	B	1月のアンケートで「傾聴力」が60.4%、「発進力」が71.3%であった。 授業の中や面接練習の中で「傾聴力」「発信力」を伸ばす機会を増やした。	A	A	推薦入試などの面接でしっかり応答ができた者はアンケートでも肯定的な意見を持っている。	1年次から3年間を見通して発表する場を多く設け、プレゼン能力をつける必要がある。総合的な学習の時間をもっと有効に使用する必要がある。	妥当である。	適切である。